

ローテクとハイテクが合体したマグロ漁業



有限会社浜田漁業部
(宮古市)
代表取締役社長

濱田 雄司

魯漕き船から遠洋漁業へ

当社は、大正5年に先々代の濱田清吉が帝國海軍を退役後、宮古湾で魯漕きのイカ釣り船からスタートした新参者でした。

そのころの宮古では、定置網漁業者や米国式いわし巾着網漁業者、北洋でのラッコ、オットセイ漁業者などの大物事業家が一世を風靡していた時代でもあり、浜田漁業部は吹けば飛ぶような家内漁業者でした。

その後、スルメイカ漁で儲けた資金で焼玉エンジンの動力船を建造し、モウカサメ流し網漁を行っていました。戦争の徴用により中国揚子江で用務につくことになりました。しかし戦火により、あえなく船を焼失。

戦後、漁業を再開し、焼玉エンジンからディーゼルエンジンに替え、その後、中部流し網サケマス漁、母船式サケマス漁業に進出し、これにより経済基盤を確立する事ができました。

これをもとに昭和40年初期に遠洋まぐろ漁船を建造。北洋サケマス漁の衰退とともに、本格的に遠洋まぐろ漁業へとシフトし現在に至った次第です。

大海原の自然を相手に

ここで、マグロはえ縄漁についてご説明いたします。

マグロ漁というと直ぐに思い浮かべるのが大間のマグロ漁だと思えます。あの大間のまぐろ漁船は殆どが一本釣り漁船ですが、私たちが行っている漁業はマグロはえ縄漁業です。

この漁業は全長約100〜130km（例えるならば、直線で言うと宮古〜一関位の距離）のはえ縄3000〜3500本の釣り針にイカやアジなどの餌を付けてマグロを獲る漁法です。主な漁場はインド洋を主戦場としてい

ます（日本近海を対象とした漁場ではなく、全世界の海が漁場ですので、今、問題になっている日本近海の本マグロ漁獲規制の対象になっていません）。

同じインド洋の漁場でも船によっては大漁の船もあれば、駄目な船もあります。昨年度も、今年も駄目だったということもあり、そのためには失敗しても困らないだけの資金を貯めておかねばなりません。

企業経営者のなかには業績が良ければ直ぐに事業規模の拡大を図る人がいますが、漁業に関しては自然が相手だけに慎重さが大事とっています（過去にはそのようにして失敗した経営者を沢山みました）。

陸の企業も同じことだと思えますが、漁業も時代の先取りと、見極め、進取の精神のもとに事業を行っていかないと、生き残ってはいけないものと思います。

漁船経営の勘所

先代から、「漁業のような第一次産業はどのような時代が来ててもゼロにはならない、何社かは必ず生き残る。生き残る会社は大企業とは限らない。企業規模とは関係なく、内容のいい会社が生き残るのだから経営内容をよくして最後まで頑張るしかない」と、よく言い聞かされました。

それにはどのようにしたらいいか。アンテナを張っていろいろな情報を集め、計画を決めたらいち早く実行に移す事と、人材の確保や育成が大切です。

漁船経営というのは、例えるならば、野球の球団経営と同じと言えます。

球団経営者は船主（経営者のこと）、監督は船頭（漁労長ともいう）、選手は船員です。監督の采配一つで、試合に勝ったり負けたりします。最近の野球はデータを駆使した戦い方をするようになりましたが、最後は監督の直感による采配で勝敗が決まるのではないのでしょうか。

漁業も最近では人工衛星を使って漁場の水温図や潮の流れ、そしてリアルタイムで送られてくる気象データを利用して、4〜5日先まで予想できる情報を得ることができるようになりました。それにもとづいた船の運航もできるようになりました。

しかし、野球と違って相手は魚です。この魚と「お友達になる」のが船頭の力量と言え

ます。

いろいろなデータを駆使しても、最後は野球の監督と同じで船頭の勘と漁運次第です。よく、釣り番組で自分は全く魚が釣れないのに、隣の人が沢山釣っているという場面がありますが、あれがまさにその人の漁運と言えます。

ITやAIと、ハイテクの時代だのなんだのと言っても、漁業に関しては、最後は船頭の技量と漁運次第です。自然を相手にした商売のなかで、漁業ほどハイテク+船頭の勘がマッチしないと成り立たない商売はないでしょう。どんなに頭が良い船員でも漁運に恵まれ



当社清福丸の漁場

なければ船頭になれません。また学歴や年功序列のまったく通用しない職業でもあります。

人間的AI、「魚とお友達に」

球団側としては誰を監督にしたら勝てるか、と同じで誰を船頭にしたら魚が獲れるかで決めなければなりません。この点が頭の痛いところ。これだけはやらせてみないとわからない世界です。

また、自然が相手ですので、最後は神様にお願ひするしかないのがこのマグロ漁業です。常に自然を敬い感謝し謙虚な気持ちでのぞまない、しつぺ返しを食らいます。

この進んだ世の中に神信心すること、これに對し笑われるかもしれませんが、うかがい知れないエピソードが沢山あります。今回は紙上の関係で省略させていただきますが、不思議な世界でもあります。

今後、企業活動はAIに支配される世の中になると言われていますが、されない商売の筆頭格はこの「マグロはえ縄漁業」でしょう。なぜならばAIは「魚とお友達」になれないからです。

ローテクの残された唯一の事業と認めてこれからもこの商売に付き合っていきたいと思えます。また、息子の専務にはAIでは駆使できない、いろいろな事を経験させ、ノウハウを頭に叩き込んで「人間的AI」に仕立てることが、私の務めだと思っています。